2023.4
春・夏
No.116

鴨東通信

思文閣出版

❖日常語のなかの歴史29
じゅうはちばん／おはこ【十八番】 ◆金智慧

❖ていーたいむ
染織品に導かれて四〇年
——日本人の「装い」を見つめて—— ◆河上繁樹

エッセイ
思想史研究の面白さ ◆前田勉
鈴木大拙と縮小社会 ◆山田奨治
『明治維新と大衆文化』の刊行に寄せて ◆瀧井一博
絵巻を出版するにあたって ◆長村祥知

❖ミレニアル世代の研究レシピ3
大江匡衡との再会 ◆鈴木蒼

❖史料探訪77
戒めの画か、神像か
——「徳川家康画像」の謎—— ◆薄田大輔

河上繁樹（関西学院大学教授）著

装いの美術史―織りと染めが彩なす服飾美

3月刊行

A5判上製・三四〇頁／**定価 五、五〇〇円**

人はなぜ装うのか。

衣服は体温の調節や身体の保護という実用性のみならず、装う者の身分や帰属の表示、自己の表現など様々な役割をもつ。服装は社会のなかで生まれ、他者の視線と自己の意識によって変化し、時に制度となり、あるいは時世粧となって歴史のなかに刻まれてきた。絵画に描かれた服飾を読み解き、その服飾を彩る織りや染めの技法を解明し、文様の意味を問えば、それを着る人の立場や時代背景、ときには心情までもがみえてくる。

将軍・僧侶・姫君から通人まで、日本人はどのような服を装ってきたのか。歴史をつうじて服飾のもつさまざまな意味を探る。

【目次】

はじめに
第一章　和の装い
―四季をまとい、常盤をねがう
第二章　仏法を装う
―請来された高僧の袈裟
第三章　裂の装い
―茶席に彩りをそえる名物裂
第四章　外交の装いⅠ
―足利義満の「日本国王」冊封
第五章　外交の装いⅡ
―龍になれなかった豊臣秀吉
第六章　姫君の装い
―桃山時代の華麗なる服飾
第七章　傾く装い
―片輪車の文様史
第八章　花洛の装い
―東福門院の小袖から友禅染まで
第九章　物語る装い
―『源氏物語』と『伊勢物語』を模様にした小袖
第十章　「いき」に装う
―江戸に生まれた服飾美
おわりに

【著者略歴】

1956年生。1981年、関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程（美学専攻）修了。同年、文化庁文化財保護部美術工芸課文部技官に就任。1990年、京都国立博物館へ転勤、学芸課主任研究官、工芸室長を務める。1994年～2001年京都大学大学院人間・環境研究科教官を併任。2001年4月より関西学院大学文学部教授。論文「南宋絹織物にみる二、三の特色について」において國華賞授賞。

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

日常語のなかの歴史29

じゅうはちばん おはこ

〈十八番〉

歌舞伎に興味がない人でも「十八番」という表現には馴染みがあるのではないか。十八番とは、最も得意とする物事、とっておきの芸を表す言葉で、近世期に秘蔵の芸、得意の芸のことを「お箱」「箱入り」と称したことから「おはこ」とも読ませる。

幕末明治期の戯作者・山々亭有人が「此の十八ばんといへることは此の時代通言にてかの歌舞妓十八ばんの名ごりなり」（『春色江戸紫』三・上）と記しているように、歌舞伎役者の七代目市川団十郎が、天保三年（一八三二）から先祖代々に継承されてきた当り芸の十八種を選定し、「歌舞妓（伎）十八番」と銘打ったことに由来すると説明されることが多いが、実はそれ以前から存在する語であった。

天保期に活動した狂言作者・三升屋二三治によると、「暫　鳴神　毛抜　助六　牢破　矢之根　草摺外良　相撲　対面　無間　帯引　五人男　清玄草履打　男達　髪洗　不破名古屋　右拾八番といふ事昔より歌舞妓狂言のいゝならはしにて木戸前にて人呼に今は助六じゃ〳〵とよふを拾八番の内呼ものといふ事の始」（『戯場書留』上）であり、十八番は必ずしも市川家の家の芸に限らず、歌舞伎の人気演目の十八種を包括していう言葉であった。すなわち、江戸中期以来、役者が得意とする芸や特徴的な演目をさす表現として十八番が生成され、それが、七代目団十郎による「歌舞伎十八番」の選定を機に、ある人の得意芸を表す慣用語として定着したとみることができるだろう。

十八の意味に関して定説はないが、江戸時代まで成立した日本仏教の宗派を総称して「十八宗」といい、武人に必要な種目の武芸を「十八般」と称したことなどに鑑みると、十八という数字には、ある範疇に含まれるもの、またとりわけ代表性を持つものの意味があったと看取される。七代目団十郎が自らの家の芸を「市川家十八番」ではなく「歌舞伎十八番」と命名したところに、梨園における市川団十郎の存在の絶大さと威光が覗かれ、その名の重みが今日の十三代目団十郎に背負わされているのは感慨深いことである。

（金智慧・京都大学人文科学研究所助教）

てぃーたいむ

染織品に導かれて四〇年
――日本人の「装い」を見つめて

河上繁樹（かわかみしげき）
（関西学院大学教授）

染織史の視点から日本人の装いについてまとめた『装いの美術史』が刊行されます。著者の河上繁樹さんに、本の内容と、染織史研究者としての四〇年間の道のりについて伺いました。

■就職で選んだ染織史研究の道

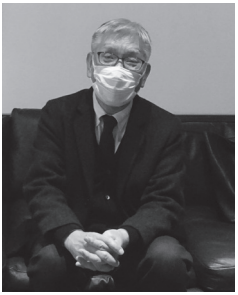
――染織史研究というのは絵画史や彫刻史に比べると馴染みが薄いですが、どのような道を辿ってこられたのでしょうか。研究生活のスタート時のお話から聞かせてください。

河上：僕は大学・大学院まで絵画史を勉強していたのですが、就職で縁あって文化庁文化財保護部美術工芸課の工芸部門で採用されました。面接で「陶磁器か染織品か、どちらかを担当してください」と言われて、それまで学んでいた絵画に近いのは染織の方かなという理由で決めました。ですから、染織の知識はほぼ無い状態でのスタートです。当時、大学で日本の工芸を学ぶ学生なんてほとんどいない状況でした。文化庁の工芸部門は金工・刀剣が専門の主任文化財調査官と、漆工専門の文化財調査官、そして僕が一番下っ端で肩書きなしの文部技官。上司から仕事のことは教わりましたが、染織については専門が違うので自分で勉強しろということで週に一回、東京国立博物館の染織室に通いました。

当時の東博の染織室長は今永清士先生で、とてもよくしてくださった。朝、博物館へ行くと、「収蔵庫に行こう」と言われてなかに入ったら「また昼になったら開けるから」と言って外からガチャンと鍵をかけられた（笑）。収蔵庫のなかで一人ぼっち、ほぼ素人状態なので、何をどう見ていいかわからない。「早く昼が来ない

かな……」なんて思いながらも、とにかく収蔵庫の引き出しを開けては見ることをひたすら続けた。当時、東博には小笠原小枝先生もいらっしゃったので、いろいろと教えていただくこともありました。あと文化庁の仕事としては、重要文化財指定のための議案説明書作りで、とにかく真剣に染織品と向き合いました。そんな感じで、半分独学みたいな面もあり、遠回りをしたかもしれません。最初の頃に難しかったのは、織物の種類を理解しないといけないことで、例えば綸子（りんず）という織物が言葉としては把握できても、実際の物を見たらどれが綸子なのかわからない（笑）。ひたすら物を見て、わからないことは博物館の先生たちに一つ一つ聞いて、あとは自分で本や論文を読んで勉強していきました。

その後、京都国立博物館に移りました。京博では、年に一〇回ほど展示替えをするので、収蔵庫のなかで実際の物を見て、前任の切畑健先生が書き残した解説を参考にしながら知識を増やしました。とにかく眼の前に染織品があって、その物をこちらが知っていくということの積み重ねで、わかることが増えてくると、段々楽しくなってきました。それも最初の内は半分、勘なんですよね。「ここがこうだから、この時代のものだ」というふうな論理的な説明が自分のなかできちんとできていた訳ではなかった。それが、その後に大学に移ってからは、学生たちに対して「見たらわかるやろ！」では通用しないこともあり、研究の視点も変わりました。



――どのように変わったのでしょうか。

河上：博物館にいた時は、物を中心に考えるので、まず技法に興味が向きました。特に染織は技法がいろいろあるからたいへんなんです。技法を理解しないと染織はわからないと思っていました。もちろん基礎としてはそうなのですが、次第に技法だけでなく、染織品を服飾としてマクロな視点からとらえるようになりました。一九九九年に開催した「花洛（みやこ）のモード――きものの時代」という展覧会は、その集大成です。

大学に移ってからは、ますます服飾としての染織という考え方へ傾斜していきました。そもそも授業で染織の細かな話しをしても、教え方がへたくそなので学生にはなかなか理解してもらえません（汗）。もがいているうちに、授業の内容が変わり、自分の関心も変化しました。

今回「装い」をテーマに本をまとめましたけれども、「装う」というのは人間の行為なので、物だけを見ていても「装い」は見えてこないんですよね。「装い」の手がかりは、絵画でした。絵に描かれている人の装いを見れば、どの時代にどんな人たちがどのような服を着ていたのかがわかりますから、染織そのものの位置づけもより明確になります。絵画のなかに装いに関する情報がいろいろとある。今回は各章の扉に口絵として絵画を掲げました。僕の場合は染織を見ることが研究のスタートですが、今回の本は、ただ物に迫っただけではなくて、「結局、染織を使うのは人なのだ」という視点でまとめたつもりです。

今回の出版では、本のタイトルを『装いの美術史』としました。美術史としたのは、もともと大学で学んだ美術史という分野が僕の研究の基礎になっているからです。専門はと問われれば、「染織史」と答えますが、美術史ではマイナーな染織・服飾の視点からの研究という気持ちを込めたタイトルです。

■文化財に導かれた研究生活

――論文のテーマは、物との出会いによって決まることが多かったのでしょうか。

河上：そうですね。僕の場合は、仕事のなかから課題が湧いてきました。最初は気が進まないこともあるのですが、「知らん」というのは格好悪いし、仕事だからと調べていくといくつかわかることが出てきて、ある程度答えが見えてくるとさらに興味がわいてくる。第五章で書いた妙法院の明服は、京博の社寺調査で出会ったものです。蔵のなかから「なんか入ってそうや」という唐櫃を運び出して、開けたら染織品がいっぱい詰まっていた。ぱっと見たときに「中国か、それとも朝鮮かもしれない……」と。そこら辺もわからないのが第一印象でした。仕事でなければスルーしていたかもしれません。でも調べるうちに、それが豊臣秀吉と関係のある歴史的に重要なものであるというのが見えてきた。

そういうふうにまず物と出会って、段々と興味を持っていくと、その周辺にも関心がいく、みたいな形で研究生活が発展していきました。普段なら読みそうもない論文に目を通す。先達の研究から教わることはたくさんあり、それが自分の知識になっていきます。そういうわけで、自分で主体的にテーマを選ぶことは少なかったかもしれません。出会いと言うのは大事ですよね。そこからチャンスが広がっていく可能性があります。

――文化財に初めて対峙する時、染織の場合はどのあたりから近づいていかれるのでしょうか。

河上：まずは物をできるだけ正確に見るということです。具体的には、織物があって、織物としてはどういう組織で織られているのか、そこにどのような加飾がほどこされているか、何の文様か等、調書作りをします。調書作りは、文化庁時代に鍛えられました。物を確実に自分の眼の中に入れていく、みたいなことをしているうちに、経験則として「大体この時代だろうな」みたいなことが判断できるようになります。ただ、それだと本当に即物的なことしか書けないので、物にまつわるその時代の文化、あるいは人物との関わりみたいなことを調べていきます。

例えば、江戸時代の一七世紀後半に流行した「寛文小袖」と呼ばれる様式の小袖は、そこそこの数が伝存しています。綸子地に鹿の子絞りや刺繍で模様をあらわしたものが多く高級な小袖でした。鹿の子に注目すれば、本格的な手絞りの鹿の子か、鹿の子模様を模倣した型染の摺り疋田の違いがあったり、手絞りの鹿の子の場合、鹿の子の一粒が抜け落ちることがあり、それを補うのに、白糸で刺繍するか、胡粉を塗って誤魔化すか、それによって超高級品か否かがわかったりします。寛文小袖は大柄の模様を片寄せて配置する構成に特色があり、様式論として語ることはできるのですが、広がりのある議論を展開するためには、寛文七年に刊行

された小袖雛形本『御ひいなかた』や同時期の雁金屋の史料に着眼すれば、小袖模様の意味解釈や東福門院という着用者の問題に言及できます。寛文小袖をたんに染織品とみるだけでなく服飾としてどういう意味を持っているのかということを文献資料に照らして、時代と物との具体的な結びつきを見ていきます。

――調べたけど結局何だかわからなかったという物もありますか。

河上：正直なところ、全体で見たらわからない物の方が多いと思います。「多分こんな時代でしょうね」くらいは言えるかもしれないけれども、それ自身を歴史のなかに意味合いを持たせて位置づけるというのは、そう簡単にはできません。

例えば、江戸時代の小袖はたくさん残っていますが、全てを把握しようとするのは無理だし、意味がありません。まずは基準になる物を調べていくうちに、自分のなかである尺度ができて、今度はその尺度から別のわからない物がわかるようになってきたり、「ここら辺に位置づけられることはできるな」ということがわかって、少し広がったりします。今回の本も『装いの美術史』というタイトルですが、「通史ではありません。僕が勝手に興味を持った物について、勝手に書いただけです」ということを序で一応断っています（笑）。そういう、何かネタになるような物にどれだけ出会えるかは、運ですね。たまたま僕はいくつか幸運な出会いに恵まれたと思います。

――特に印象に残っている調査はありますか。

河上：文化庁から京博に移ってすぐに経験した、高台寺の調査です。前年に大体の調査は終わっていたのですけど、「何か染織が残っているようだ」ということで調査に行ったら、お寺の方丈に折り畳んだ状態で打敷が積んであって、広げてみるとほとんどが桃山時代の唐織でした。「今まで知られていない物がまだこんなに出て来るなんて、やっぱり京都ってすごいな……」という驚き。そのなかに「高台院殿御寄附」と書かれた打敷がありました。しかも慶長一二年（一六〇七）の年紀をともなっていて、これはもう唐織の基準作です。打敷の縫い目をたどれば、もとは小袖であったこともわかります。別の打敷には大柄の枝垂れ桜が刺繍してあって、裏に慶長七年（一六〇二）の年号が墨書されていました。これも小袖を仕立て直した打敷でした。一日で桃山時代の基準作となる打敷（小袖）二枚に出会えるなんて、とても運のいいことです。

これらの打敷に混じって、ボロボロになった刺繍がでてきました。「なんやこれは」と思いながら見てみたら、どうもマリア像のように見える。キリスト教を禁じた秀吉と関係するお寺からこういうものが出て来るというのは、どういうことなのかな……というのがすごく印象に残りました。専門の立場から見たときにこの刺繍について何が言えるのか。その頃はまだ経験が浅かったので、日本の刺繍とは違うと直感しましたが、ヨーロッパの刺繍をほとんど見たことがなかったので、正直なところどこの国の刺繍かもわからなかった。これについては『美術史を愉しむ』（関西学院大学美学研究室編、一九九六年）に論文として発表したのですけど、すぐに書けたわけではなかったです。たまたま文部省の在外研修でヨーロッパに行く機会に恵まれたので「似た図像の刺繍はないか」と探しましたが三カ月もの間、なんの手がかりもつかめず、「空振り

や……」と思いながら帰国直前にパリのギメ美術館を訪れ、ミュージアムショップでお土産を物色していたら、たまたま手に取った図録にあの高台寺のマリア様に似ている刺繍の写真が載っていた。「これや！」と思いましたが、フランス語だから何が書いてあるのかわからない（笑）。とりあえず買って帰ったら「中国製」とわかりました。その後に調べを進めて、高台寺のマリア像も中国のものだという結論に至りました。

このような感じで、急いだからといって結論が出るわけではなく、ずっと同じテーマを考えているわけでもない。「もうわからんわ！」と放っておいたときに何かヒントが出てくる、ということはありましたね。

■装いから見えてくる日本

――染織史の観点から見える「日本人らしさ」はありますか。

河上：染織というよりも、服飾としてあると思いますね。第一章に書いたようなことですけれども、やっぱり日本人のなかにある季節感というのは、これは直接装いと結びついてきます。それは夏の服、冬の服という単純なことではなくて、例えば色合いについても、襲（かさね）の色目（※衣服を重ねて着たときの色の取り合わせ）というのがある。春には「桜の重ね」とか花の名前を付けて、秋になったら秋の植物の名前を借りて襲の色目の呼称にします。平安時代の『満佐須計（まさすけ）装束抄』には「女房の装束の色」が列挙されています。そのなかで「八月一日より十五日まで」着る襲の色目として「龍胆（りんどう）」がありますが、「杜若（かきつばた）に同じ」と書かれています。「杜若」は五月に着用する色目で、薄色（紫の薄い色）三枚を匂わせ、青の濃淡二枚を重ね、さらに紅の単を組み合わせたものですが、同じ色の組み合わせでも秋に着れば「龍胆」と呼びます。襲の色目は多くの場合、季節の植物の名前を借りてくるというのは、日本人にとって植物と季節感が不即不離の関係で成りたっているということです。それが装いのなかにも、色合いや模様として反映されているので、そういう点は日本独特の感性がはたらいていていると思います。

日本の着物には、花の模様が多いと言えますが、それはただ単に花が綺麗だから模様にしているのではなくて、花の背景に季節感があって、それが装いに反映している。それが日本独自の世界じゃないかなということです。関西学院大の美学科の基礎を作ったのは源豊宗先生で、源先生は「日本を象徴するものは秋草だ」と書かれているので、学統なんて大げさなものではないですけど、先生の言葉を借りて考えてみたことを第一章で少し書いています。日本人の感性のなかにある独自の季節感が装いに出てきているのは実感するところです。

――アニメの影響などで昔の日本人の装いに興味を持つ若い人が国内外に増えていますね。これから染織・服飾を学んでみたいという方に一言お願いします。

河上：結構アニメでも日本の古典を元にしてできているのがありますね。元になっている古典や日本文化にもぜひ興味を持ってもらいたいです。江戸時代のきものの模様を理解するには、古典文芸や和歌、謡曲などの知識が必要な場合があります。江戸時代に

は、浮世絵や歌舞伎などでも古典を題材にしながらもそれを当世風にアレンジして楽しんでいますよね。きものの模様にも古典に基づいたものがあります。その辺りのことは、第九章の「物語る装い」で取りあげました。橋の模様一つにしても、古典文芸などを介してさまざまな意味を読み取ることができます。そこに男と女の感情が読み取れたりして、今も昔もかわらない普遍的なテーマを模様にして楽しむなんて、遊び心が感じられてとてもおもしろいです。そのような問題は、しかめっ面して研究に取り組むのではなくて、当時の人びとの気持ちを想像してみて、こちらも遊び心を忘れずに研究すれば楽しくなりますよ。

着物については色々と本も出版されていますけど、染織史の本は少ないですね。染織の本は、服飾よりも技術的な記述が多くなり、専門的になるので難しく思われます。一冊読めば、すべてわかるというような、マニュアルみたいな本はありませんので、織りと染めの基礎をコツコツと学んでください。技法がわかってくると楽しくなってくるのですが、技法論に陥ることなく、何のために染織が求められたのかを忘れないようにすることが大切です。その代表が服飾です。服飾を研究するうえで染織の基礎知識は必須です。さらに服飾の歴史を見れば、人との関わりのなかで服飾にさまざまな役割が与えられていることがわかりますが、それを形にしているのは染織です。物に即して染織から始めたとしても結局は人との関係です。

――染織史研究には若い人が参入する余地がありますか。

河上：染織史に関してはまだまだ隙だらけ、穴だらけでしょうね。どんどん若い方に入ってきていただきたい。

これからまた観光客が増えるでしょうが、海外からなぜ日本へ来るのかという理由のなかに、長い歴史をもった日本独自の文化の魅力というのがあると思います。それを日本人自身がちゃんと評価できてないと残念ですよね。子どもの頃から自国の文化について体験的に学ぶような経験をしないと伝統的な文化への関心はなかなか芽生えません。歴史のなかで積み重ねられてきた文化というのは、その環境のなかでしか継承できませんから、日本の文化の価値というのが世界的に見たときにも誇れるものなのだということをしっかりと認識して、その文化を継承していこうという気持ちが若い人の間で育ってくれたらいいですね。日本人が日本の文化に興味を持って、その価値を理解出来たら、守っていかないといけないんだということがわかってくるんじゃないかなと思います。その一つとして染織という分野を入れてもらえると嬉しいです。

ぼくも広い意味では、文化財保護をやっているつもりです。でも、本音を言うと、「文化財を守るんや」という大義が強くあったわけではなく、仕事を通じて出会う物たちに導かれて、ただただ知らないことが多すぎて勉強してきた。振り返ると、これでよく四〇年もやって来られたな、という思いです。ありがとうございました。

（二〇二三年二月二七日　於・思文閣本社）

思想史研究の面白さ

前田勉

思想史研究の面白さは、何と言っても、埋もれていた思想を発見するところにある。これまで知られていなかった人物や考えを見つけた時の驚きと喜びは、忘れ難いものである。思いもかけない出会いと言ってもよい経験である。

今から三〇年前の夏、尾張徳川藩の貴重な蔵書を収めている蓬左文庫での出来事である。一仕事を終えて、何気なく蔵書目録を開いて、吉見幸和（一六七三～一七六一）の名前を見つけた。その時は、「神は人なり」と説いた神道家という位の知識しかなく、名古屋東照宮の神官だったことすら知らなかった。ただ「国学」という題名に惹かれて、『国学弁疑』という本を閲覧した。ぱらぱら斜め読みしているうちに、次のような一節が眼に入ってきた。

所謂日本魂にして念々忘れざれば、則ち身不肖と雖も、宜しく八百万神の末席に列なるべし。　（『国学弁疑』巻二〇）

「日本魂」をいつも忘れなければ、どんな不肖の身であっても、「八百万の神の末席に列なる」ことができる。靖国神社に通ずる神観念があるではないか。思わず、閲覧室で叫びたくなる衝動を覚えた。一体、一八世紀の中頃に、どんなところから、こんな奇妙な観念が生れたのだろうか。この疑問をもって、私の近世神道・国学研究が始まった。幸和が影響を受けた垂加神道を手始めに、林羅山や増穂残口などの神道思想家、さらに「敷島のやまと心を人問はゞ、朝日にゝほふ山桜花」と歌った本居宣長の国学へと研究の範囲を広げていった。そのなかで、江戸時代、なぜ天皇権威が権力の外にいた人びとの間で浮上していったのかという大きな疑問が膨らんでいった。拙著『近世神道と国学』（ぺりかん社、二〇〇二年）は、その疑問にたいする私なりの解答である。

また、「会読」も忘れられない出会いであった。二〇〇五年秋に本居宣長について報告する機会があって、その準備のため、『玉勝間』を読み返している時に、「くわいどく（会読）」という言葉に出くわした。

今やうの儒者などは、よろしからぬわざをして、会読といふことをぞすなる。　（『玉勝間』巻八）

日本思想大系（岩波書店）の頭注には、徂徠学周辺の逸事を集めた湯浅常山の『文会雑記』の「書ヲ会読スルト云事、中華ニテハ決テナシ」の一節が引照されていたが、その時には、「会読」とい

う言葉が徂徠の著作のどこにあるのかさえ、思い浮かばなかった。後で知ったことだが、複数の者が経書や史書を対等に討論しながら共同読書する「会読」の学習方法は、すでに教育史の研究では常識になっていた。しかし、教育史の枠を超えて、江戸思想史全体のなかで「会読」がもつ意義について考察するという研究はなかったからである。私の「会読」研究はこの盲点とも言える未開拓の分野に取り組んだものである。その成果が拙著『江戸の読書会――会読の思想史――』（平凡社選書、二〇一二年）である。

『玉勝間』の「くわいどく」のように、よく知られたテクストのなかにも、発見がある。卒業論文以来、山鹿素行（一六二二～一六八五）の『謫居童問』は、何度も読み返してきたテクストだった。最近になって、そこに「仕置」という言葉があることに気づいた。「仕置」というと、裁判や刑罰の「御仕置」というイメージが強いが、素行の時代には、統治・行政の意味で「仕置」が使われていた。素行はこの「今の俗語」の「仕置」が政治の本質であると説いていたのである。

問　事の変あらんときの政如何。

答　政は事の不起前にあらかじめ設くるがゆゑ、変に及んで惑ふことあらざる也。今の俗語に天下の政を仕置と号す、是れ古の所謂備也。

（『謫居童問』巻六）

政治とは、飢饉や災害、あるいは戦争のような変事に備えて予防措置をしておくことであるという。この「仕置」という言葉は、「治に居て乱を忘れず」を標榜した近世国家の現実政治と素行の「聖人の道」との接点となるのではないか。そう直感して、素行の全集を読み直し、さらに荻生徂徠と後期水戸学の統治論にまで考察の範囲を広げていった。今度、刊行される『江戸思想史の再構築』第Ⅱ編第二章「近世国家の「仕置」政治論――山鹿素行を起点にして――」はその成果である。

今から振り返ってみると、新たな思想や言葉との出会いは必然だったような気がする。たしかに『国学弁疑』の一節にしても、「会読」にしても、偶然の出会いであったが、実は私自身にそれを受けいれる問題意識があったからこそ、その出会いが生れたと思えるからである。自覚していなかった問題意識が、その言葉との出会いによって、露わになったとも言い換えることができるだろう。この最初の出会いの驚きを大事にしながら、自覚した問題意識を深め、研究範囲を広げてゆくことは、根気と時間のいる作業である。しかし、その分、論文や著書として結実した時、大きな喜びがある。私が今まで何とか思想史研究を続けてこられたのは、この喜びがあったからである。

（愛知教育大学名誉教授）

前田勉著
『江戸思想史の再構築』
A5判上製・六八〇頁／定価 二、〇〇〇円
▼詳細29頁

鈴木大拙と縮小社会

山田奨治（やまだしょうじ）

思文閣出版からは、二〇二〇年に共編著の『鈴木大拙　禅を超えて』を上梓し、二〇二三年夏には編著の『縮小社会の文化創造』を刊行する予定だ。二〇世紀の世界的な仏教学者の「鈴木大拙」と、現代日本の大きな課題である「縮小社会」とが、この著者のなかではいったいどうつながっているのか――そういう疑問が読者には湧いてくることだろう。

その答えのひとつは、筆者が勤務する国際日本文化研究センター（日文研）のミッションとして、学際的な研究をしなければならないことにある。幸いというか、筆者は特定のディシプリンを持っておらず、どの学派にも属さないため、権威者に睨まれることを恐れることなく、学問の枠を超えた研究を気兼ねなくやってきた。そういう立場は、日文研と相性がよいように思う。もうひとつの答えは、一見関係のなさそうな「鈴木大拙」と「縮小社会」とのあいだにも、実は糸がつながっていることにある。

『鈴木大拙　禅を超えて』は、同僚だったジョン・ブリーン氏とともに二〇一六年に日文研で開催した国際シンポジウムの成果をまとめたものだ。同シンポジウムでは、主に欧米からの代表的な大拙研究者が一同に会して熱い議論が交わされた。偉大な禅学者としての大拙のイメージを更新するとともに、彼の底知れぬ知的探究の跡がまだまだ埋もれていることを共有する場にもなった。

大拙の偉大な貢献のひとつは、禅をＺＥＮとして世界に知らしめ、日本への憧れを抱く外国人をたくさん生み出したことだ。大拙の英文著作は、戦前から欧米の知識人の関心を集めていた。東京裁判の関係者として来日したジャック・ブリンクリーやリチャード・デマルチーノ、フィリップ・カプローら知日派西洋人のなかには、大拙のもとを繰り返し訪問して教えを受けた者もいる。また、彼らから噂を聞いたパール判事らほかの外国人が、「大拙詣」をすることもあった。

一九五〇年代末からは、西洋近代文明のオルタナティブを求める若者たちのあいだに、圧倒的なＺＥＮブームが起こった。しかし、それは大拙だけではなく、サンフランシスコで布教した曹洞宗の僧侶・鈴木俊隆ら複数の禅者によって、西洋向けにプレゼンされたＺＥＮでもあった。なかには彼らに感化され、来日して禅を修行しそのまま僧侶になった者もいれば、英語の書物で読んだ

ＺＥＮが日本の禅寺院にはなかったことに失望した、作家のヴァン・デ・ウェテリンクもいた。

ＺＥＮブームのサステナビリティは高かった。二〇二〇年代のいま、ＺＥＮという単語は西欧語圏で広く使われている。そして、生活のすみずみにＺＥＮがあるという大拙の語りに惹かれて、日本を訪れてみたいと思う外国人はいまでも多い。最近はＺＥＮよりもＫＡＭＩのほうが西洋の関心が高くなってきたとも聞く。それでもなお、ＺＥＮはインバウンドを日本に呼び込む魅力のひとつでありつづけている。

さて、一方の「縮小社会」である。日本の人口は二〇一八年の約一億二八〇〇万人をピークに急激な減少局面に入っている。二一〇〇年には中位推計で六〇〇〇万人を切るとの予測や、少子化は予想以上のスピードで進行しているとの報道もある。人口減が社会・経済にどのようなインパクトをもたらすのかは、さまざまな論が累々重ねられてきた。しかし、それが文化創造に及ぼす影響については、まだ論究が足りていないように思えた。そうした問題意識を共有する多分野の専門家とともに、二〇一八年から日文研で共同研究をしてきた。二〇二二年一月―五月には、京都国際マンガミュージアムで、同研究会が中心になって企画展も行った。近刊の『縮小社会の文化創造』は、それらの成果報告書である。

人口が総じて減るなかでも、とくに生産年齢の人口減は深刻である。地方の農林水産業・製造業はもとより、都市部のサービス業でも外国人労働者の手を借りないと産業が成り立たない現実がすでにある。また科学技術力の衰えも顕著で、これからの日本はギリシアやイタリアのように文化観光で外貨を稼ぐことに力を注がざるをえないのかもしれない。

いまインバウンドを呼び込む強力なコンテンツは、マンガ・アニメ・ゲームだろう。それらに加えて、ＺＥＮの影響が強いと一般に理解されている日本庭園、武道、茶の湯もまた、相変わらずの誘因力を保っている。そう考えると、縮小社会の問題の解決を外国人の流入に頼るとするならば、鈴木大拙は外国に向けて日本文化の魅力を発信した先駆者だったといえよう。

もちろん、単に日本の魅力を高めて外国人を大勢呼び込もうというのでは、旧来の成長信仰となんら変わりがない。重要なのは経済が成長しなくても豊かな文化を創造すること、そのために個人が文化活動に使える「可処分時間」を増やすこと、その裏づけとしての最低限の所得保証、そして「大きな箱」ではなく、文化活動のための「小さな場所」をそちこちに作ることではないかと考える。

近刊の『縮小社会の文化創造』では、右肩上がりを望む高度成長期やバブル期の価値観を早く脱し、文化創造のなかに個々の「生」の充実を見いだすことを提案する。それは、ひょっとしたら大拙が唱導した、禅の「無一物」の教えと親しいものがあるのかもしれない。

（国際日本文化研究センター教授）

『明治維新と大衆文化』の刊行に寄せて

瀧井一博

このたび、思文閣出版より『明治維新と大衆文化』と題する論集を刊行する。大学院時代からの畏友アリステア・スウェール氏との共編である。というより、私はお相伴にあずかるかたちで編者に名前を連ねているにすぎない。この企画は、ひとえにスウェール氏からの賜物である。

スウェール氏は、二〇一九年度に筆者の勤務する国際日本文化研究センター（日文研）の招聘で来日し、その年の九月から一年間、日文研において共同研究会を主宰されるはずだった。研究会のタイトルは、「大衆文化と文明開化――幕末から明治への激動期における大衆メディアの位置及び役割」というもので、明治時代の文明開化という現象を、当時の大衆文化の展開に着目しながら、いわば下からの目線で捉え直すことを目的としていた。

しかし、その後、周知のように新型コロナウィルスのパンデミックが発生。スウェール氏は、所属先のニュージーランドのカンタベリー大学から帰国要請があり、任期途中で日本を離れなければならなかった。だが、スウェール氏の人脈で集ったメンバーの間では研究会の続行を求める声が強く、オンラインによって所定の研究会を完遂することができた。これはひとえにメンバー間のシナジー効果の現れである。私にとって、この研究会は、本来ならば知り合えるはずのなかった文化人類学、メディア史、文学、美術史という多彩な研究者と交流できる極めて刺激的な場であった。まことに学際的なかたちで、文明開化という歴史現象を考察する貴重な経験がもてた。

これまで文明開化といえば、維新政府による「国策」として、すなわち上から強行された改革としてなされたとの認識が根強かった。これに対してこの共同研究会では、絵入新聞や小新聞の普及やそれらを通じての錦絵や戯作文学の流通、博覧会などによる文明の娯楽化機能といった民衆レベルでの文明開化の受容と発信を射程に入れ、文明開化をより立体的かつダイナミックなものとして考察することが謳われた。また、江戸文化からの継続性を見据えながら、開化の源流を問い直すことも目標とされた。

このような研究の観点は、すでに幾人もの第一人者によって示唆されているところでもある。例えば、日本政治思想史を専門とする苅部直氏は、次のように指摘している。

西洋文化の導入が明治政府の政策によって進められたことは確かである。しかしその普及にあたっては、単なる政府への迎合ではなく、みずから西洋の「文明」の価値を信じ、それを日本に定着させようとした知識人の努力が大きく貢献していた。……大勢においては庶民もまた「文明開化」を歓迎し、工夫を重ねることで慣れ親しんでいった。それが、明治の同時代を生きた論者たちの実感だったのである。

（苅部直「文明開化の時代」『岩波講座　日本歴史』第十五巻、二五〇頁）

このように、文明開化の展開にあたって、受け手となる民衆は決して、受動的だったばかりではない。むしろ、積極的に文明を楽しみ、開化を引っ張っていった側面もある。音楽学者の細川周平氏は、開国後の西洋音楽の受容は需要があったからとの印象深い洞察を示されていた（細川周平先生退任記念講演会「チンドンの因縁」日文研第六八回学術講演会（二〇二一年二月一六日）、https://www.youtube.com/watch?v=YMBEvFos5X4&t=102s）。文明は単に上から押しつけられたのではなく、社会の側にその需要もあったのである。それは、明治維新というものを、単に政権の交代による政治革命として見なすのではなく、江戸時代からの爛熟した思想や文化の胎動の帰結として把握する視座をもたらすものでもある。

われわれの共同研究には、貴重な先達がいる。かつて、林屋辰三郎氏の主唱のもとで京都大学人文科学研究所において行われた「文明開化の研究」である。この研究会は、「化政文化の研究」「幕末文化の研究」に引き続いて行われた言わば日本近世文化研究三部作の掉尾を飾るもので、まさに近世文化の展開過程のうえに明治の文明開化を位置づけようとする試みと言える。その成果は、いずれも同名の論集として、岩波書店から刊行された。林屋氏のみならず、吉田光邦、飛鳥井雅道、熊倉功夫といった京大人文研を彩った碩学たちが綺羅星のように名を連ねており、壮観である。文明開化の巻は、人間性の開放という意味での近代性に裏打ちされた市民文化の展開としてそれを位置づけ、制度、思想、技術、芸能といった諸局面から文明開化を内在的に考察した重厚な論集となっている（林屋辰三郎編『文明開化の研究』岩波書店、一九七九年）。

この先駆例は、何よりも文明開化を楽しんだ当時の人々の心性に迫ったものと言える。われわれの論集も、そのような文明開化の精神を掬い出そうとした。そのために、戯作、錦絵、メディア、武芸、博覧会などの大衆文化という視角から文明開化が照射されている。今回の論集は、京大人文研の論集と相補的なものとしてこの先読んでいかれたならば、編者の一人としては望外の喜びである。

（国際日本文化研究センター教授）

瀧井一博、アリステア・スウェール編
『明治維新と大衆文化』
A5判上製・三三六頁／定価 九、九〇〇円
▼詳細30頁

絵巻を出版するにあたって

長村祥知

このたび、拙編著『龍光院本　承久記絵巻』を世に出すことができた。筆者も時代考証を担当した二〇二二年ＮＨＫ大河ドラマ「鎌倉殿の13人」は幸い好評で、最近では承久の乱（一二二一年）の知名度も上がったようだが、この事件を主題とする論著を公表している研究者はごく少数である。その一人である筆者の学問的出身は日本中世史で、学生の頃から日本の古典文学や古美術品も愛好してきたが、まさか自分が「絵巻」を題に含む学術書の編著者になれるとは思ってもいなかった。

長年行方不明だった『承久記絵巻』を再発見するという幸運に恵まれ、絵巻の旧蔵者である個人様や現所蔵者である龍光院の御住職様、寄託管理されている高野山霊宝館の皆様をはじめ、様々な方の御高配と御助力のおかげで本書の刊行が実現した。

本書の図版の掲載にあたっては、鑑賞性が多少損なわれたとしても、学術資料としての厳密さを優先することを基本方針とした。

展覧会図録や影印本に資料本紙は掲載されても、表具や附属品は省略されることが多い。撮影段階の手間や費用はもとより、書籍作成段階でも限られた紙数で資料本紙中心に割付けをすれば当然の結果ではある。

しかし、諸所で文献や絵画の実物資料を調査させて頂くたびに、表具によって本紙の印象が変わることや、箱・書付・極札などの附属品こそが資料の状態・伝来・伝称筆者等について多くの情報を得る材料であることを実感する。筆者が前職の博物館学芸員として担当した展覧会では、なるべく図録・リーフレットに表具や附属品の写真をも掲載しようとつとめた。出来上がった刊行物に対して、学術資料としての価値に肯定的な反応を頂く一方で、同業者から「これ普通は載せないよ」という感想を頂いたこともあった。製作段階で印刷会社の担当者から「これ以上は余白を詰めない方がいいですよ」という意見を受けたことも、紙数の限界その他様々な事情で掲載自体を断念したことも度々であった。

そうした経験を踏まえて本書では、余白が不自然にならないようにした上で、本紙のみならず、全巻の紐・標紙・見返しと軸付き紙・軸を掲載し、附属品である箱や展示名標をも掲載した。絵巻の制作・修理や享受・伝来を他の資料と比較検討する上で、これらは欠かせないように思われるが、もちろん欠損や紙背の詳細

など、実物によってしか知りえないことも多々あり、展示観覧や熟覧調査の重要性が減じるわけではない。

絵巻を刊本にするにあたり、頁の変わり目をどのようにするかは思案のしどころであった。美術品としての自然な鑑賞を最優先すれば、本のノド（綴じ目部分）や小口（紙の切り口部分）に絵・詞書（ことばがき）があたったとしても重複部分は掲載しない、あるいは積極的に一～二㎜程度のはみ出しを削除することで、見やすくするという判断もありえただろう。実際、いくつか参照した書籍には、絵巻を掲載するにあたり、重複させていないものがあった。その本が薄いこともあり、見開き二頁の絵はごく自然につながっているように見えた。しかし、ノドや小口で省略があるかないか、その疑問を払拭する方法がないことに少しの不安を覚えた。

本書では、そうした疑問が生じないような設計にした。本書は三百頁に及ぶ厚さのため、見開きにしたときにノド近くの数㎜は見えなくなることが予想されたが、それがどの程度になるかは本の開け方によって異なるだろう。私などは分厚い本をバキっと開けることを躊躇してしまう。そこで、この本を閲覧したときに頁の変わり目でも一切の省略がないことを確認できるように、次のような方針を定め、前ほど優先順位を高くした。

・詞書・絵ともに、必ず前後の頁で重複する部分を作る。
・紙数表示は、小口・ノドであっても紙継目の真下に配置する。同じ紙継目が二回表示されてもよい。小口やノドにかかって文字が適切に表示できない場合は、記号でそれを示す。
・詞書は原則として一行分を重複させる。どうしようもない場合は絵を優先させて、前後二頁で重複させたどちらかの詞書は切れてもよい。

この方針により、詞書を掲載するほぼ全ての頁の最初と最後に前後の頁と同じ詞書一行分が入ることとなった。重複一行分以外の詞書が切れている場合は、なるべく消えるように微調整した。絵の重複部の幅は頁によって異なり、なるべく人物や木の枝、武具などで重複を確認できるようにした。

如上の方針には賛否もあろうが、本書の特徴を把握して活用して頂ければ幸いである。

これらのささやかなこだわりとは無関係に、影印本が研究上きわめて有用なことは言うまでもないが、図版がカラーだと、どうしても高価になることが多い。本書はA4判なので、研究書では一般的なA5判の約二倍の大きさであるが、公益財団法人出光文化福祉財団（当時。現 公益財団法人出光美術館助成事業部）から「出版助成」を頂いたことで、さほど高価にはならなかった。

自身が大学院生のときに某絵巻が影印刊行され、数万円という価格に躊躇して購入しなかったことがあった。それから十数年後、思いもよらず『承久記絵巻』を再発見し、某絵巻の影印本も参照せねばと思ったときには売り切れていて、コロナ禍による全国的な図書館の利用制限で閲覧にも苦心したことが思い出される。今回の本体九五〇〇円＋税という価格で『承久記絵巻』を出版できたことで、あっと言う間に売り切れないか少し心配している。

（富山大学講師）

大江匡衡との再会

鈴木蒼

まだ平安時代史研究の世界に踏み入る前、幸田露伴の小説『連環記』を読んでいたとき、大江匡衡という人物に邂逅した。彼は一〇世紀から一一世紀にかけて活躍した官人で、往時はその文才で名を馳せた文人でもあった。日本史学・国文学の界隈では、よく知られた人物である。

匡衡の手掛けた文学作品は比較的遺りがよく、同時代の古記録および説話・言談にもよく登場するため、それらを通じて彼の人となりを知ることが可能である。しかし、浮かんでくる彼の人物像は、どうもよろしくない。――昇進に汲々として、才覚を誇示し、他者を批判することも厭わない狷介な人物――、それが匡衡の実像らしい。また、国文学の研究によれば、彼の詩文には、些か過ぎた自尊や誇張、作品間での表現・漢語の類似がみられるという。良く言えば独自の作風が、悪く言えば「盛り」や「使い回し」が顕著なのである。

こうした要素のため、後世の人々による彼への目線は冷ややかにならざるを得ない。俊才として好意的に描写する『連環記』でさえも癖者とされており、現在最も拠るべき伝記である後藤昭雄『大江匡衡』（吉川弘文館、二〇〇六年）では、彼の人格について厳しい評価が下されている。当時の私はその人間臭さに驚き、素朴な興味を惹かれた。ただ、そのときは小説を読み終えてしまえば、それ以上の深入りはしなかった。

幾年か後、思いがけず私は彼と再会した。

平安時代の官人社会の構造、とりわけ身分秩序のような、「見えない鎖」の実態を知りたいと考えていた私は、文人官僚たちを調べてみようと思い立った。特に大学（京内にある大学寮管轄の学習機関）で紀伝道（史書や文章を学ぶ科目）を学び、学問のプロとして活動した人物たちは、上は公卿から下は中下級官人まで多くの身分層に存在し、生き方も様々である。紀伝道という結節点を利用して官人社会を考えていくのは、有効な手段に思えた。

とはいえ、文学作品などから読み取れる史実には限界がある。大学についても、どのような制度で運営されていたかは先学が明らかにしているのだが、その実態となると分からないことが多い。ちらほらと関係しそうな史料は目に入るのだが、それらの点を結んで線にするには、若干心もとないのである。行き詰まりを感じた

私は、予備作業として、文人官僚たちの血縁的関係や官歴を悉皆的に洗ってみることにした。ゴールのない作業ではあったが、データが溜まっていくにつれ、いくつか見えてきたものがあった。

これまでの学説では、紀伝道においては一〇世紀頃から、文章博士（教官職）が菅原氏・大江氏・藤原氏といった、少数の氏族によって世襲されるように変化すると言われてきた。しかし、改めてデータを検討すると、任官状況の変化は九世紀にまで遡るものであった。そもそも、氏族による世襲というのも正確ではなく、一一世紀前葉頃までは、文章博士などを含むいくつかの官職を、特定の血統を持つ十有余の一族が、「持ち回り」的に任官し昇進していくというのが実態であった。一方で、それらの一族でなければ、そうした官職からは疎外される。紀伝道ではある時点から、本来あり得べからざる階層性が醸成されていたのである。

この作業の副産物として、一族間の「格」差や好悪関係、勢力の浮沈なども、朧気ながら読み取れるようになってきた。そこで現れたのが、あの匡衡だったのである。

一般的にいわれる匡衡前半生の経歴は次のようである。すなわち、大江氏は一〇世紀前葉頃から紀伝道内で勢力を得た一族であり、匡衡の代には学閥の最上位層にいたが、匡衡の父重光（しげみつ）が何らかの不祥事を起こし、そのために不遇の時代を過ごした（その経験が人格形成にも影響を与えた）と。しかし、もう少し問題の根は深いのではないだろうか。

一〇世紀後半頃から起きる紀伝道内でのトラブルを調べると、匡衡に限らず、大江氏の人物が渦中にいる場合が非常に多い。詳述はしないが、大半は学生の進学試験に際して、大江氏の人物が通例から外れた行為をする、あるいは彼らが故なく試験判定の場から排斥されるといった類で、大江氏と他の有力一族との軋轢を想像せしめるものがある。こうした事件は、管見では重光による不祥事よりも前から始まっており、匡衡の子挙周（たかちか）の代まで続く。大江氏は勢力を保持しつつも、紀伝道上層部内ではずっと爪弾きにされていたのかもしれない。彼の昇進のきっかけも、妻である赤染衛門→源倫子（女房としての出仕先）→藤原道長（倫子の夫）という経路で権力者の知遇を得たことによるもので（前掲した後藤昭雄著書を参照）、紀伝道内で認められたからではなかった。

こう考えると、私には匡衡の尖った営為も、居丈高な漢詩文も、今までとはすこし違って見えてきた。自分ではどうしようもないままに背負った境涯、それに立ち向かうひとりの人間の姿が、そこに映し出されている気がしたからである。

こうは言ったものの、自分が匡衡の心情を理解できているとは思わない。千年前の他人である彼に対して私ができるのは、その痕跡をもっともらしく辿ることだけである。ただ、それで当時の人々の悲しみを僅かでも拾い上げることができるならば、歴史学もそう捨てたものではない。

（宮内庁書陵部編修課皇室制度調査室）

史料探訪 77

戒めの画か、神像か ――「徳川家康画像」の謎――

薄田大輔（徳川美術館学芸員）

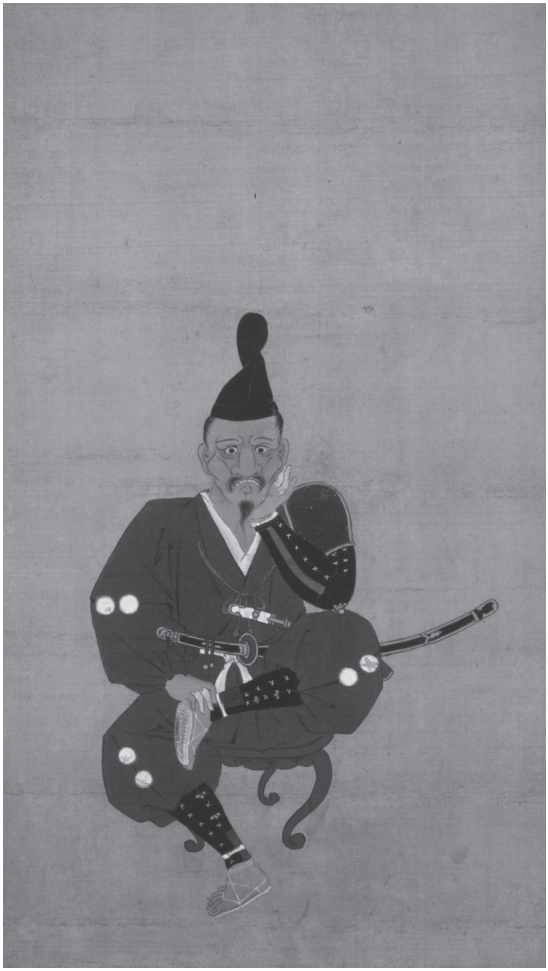
江戸時代、尾張国一円を治めた尾張徳川家の政庁・名古屋城から東に凡そ三キロ、同家二代光友の隠居地・大曽根屋敷跡に建つ徳川美術館は、徳川家康の遺産を中核として、尾張徳川家に伝わった大名道具や歴史史料を一括して保存・公開する美術館である。その歴史は古く、昭和十年（一九三五）に同家十九代義親によって、大名文化を後世に伝えることを目的に創立された。創立当初の建造物である本館と南収蔵庫は、現在も使用されており、国の登録有形文化財でもある。

今夏、徳川美術館では「徳川家康　天下人へのあゆみ」展（七月二十三日～九月十八日）にて家康ゆかりの品々を一挙公開する。天下人にふさわしい名刀、名物茶道具、近世初期の染織品、希少な舶来品など、まさしく徳川美術館の名宝が揃うわけであるが、今回は一風変わった家康の肖像を紹介したい。

「徳川家康画像（三方ヶ原戦役画像）」は、小具足姿に、その尋常ならざる表情と、頬に手を当て、片足を組んだ不思議な姿がなんとも印象的である。唇を噛む表情からか、元亀三年（一五七二）の三方ヶ原合戦で武田信玄に大敗を喫した家康が、その敗戦を生涯忘れないため、自身の敗北時の姿を描かせた、との伝承が付随していた。天下人が己の慢心を戒めるという自戒の精神は、家康の成功哲学として現代人に好まれたようで、本像をモチーフにした立体像が各地で造られるほどである。しかし、研究者の間では、装束が当世風俗に基づいていないことから、家康が描かせたとは考え難いとされており、姿勢が半跏思惟であることから家康を菩薩像、特に如意輪観音に擬えた礼拝像であったとする見方が提示されていた。平成二十七年（二〇一五）には、徳川美術館の研究紀要にて三方ヶ原合戦にまつわるエピソードには史料的根拠がないことが明らかにされたが、その後も書籍やテレビなどのメディアで多く取り上げられ、その真相に関心が集まっている。

では、そもそも像主は家康なのかという問題を考えてみよう。本像には収納箱が二つ附属し、内箱蓋表には「神君御影」と書かれ

ている。江戸時代後期の尾張徳川家の記録「御清御長持入記」（徳川美術館蔵）にも「東照宮尊影」とあり、少なくとも江戸時代には本像が家康と認識されていたことは確かである。また、尾張徳川家九代宗睦（むねちか）嫡男となった治行（はるゆき）（一七六〇～九三）の正室・従姫（よりひめ）（一七五七～一八〇四）が紀伊徳川家から嫁ぐ際に持ち込んだことも同記録から判明している。従姫が徳川家に縁のない肖像を持参するとは考えられず、紀伊徳川家でも家康像として伝わっていた可能性が高い。ただし、家康像の多くには像主を象徴する三つ葉葵紋が描かれるが、本像にはそのようなモチーフは何も描かれていない。この点で、本像は本当に家康として描かれたのかという疑問が出てくる。しかし、将軍の近親者による元日用の礼拝像と伝わる「東照宮御影」（徳川記念財団蔵）や、家康の九男で尾張徳川家初代義直（よしなお）が描く家康像（名古屋東照宮・徳川美術館蔵）では、後者には画賛があるものの、やはり家康を示すモチーフは描かれていない。近親者の礼拝像では、わざわざ像主を表象する指標を盛り込む必要はなかったのであろう。本像が家康としてあり得ない姿で描かれていないのであれば、現状では、紀伊徳川家から尾張徳川家にもたらされ、代々家康像として伝わった事実を重視すべきである。



「徳川家康画像（三方ヶ原戦役画像）」（徳川美術館蔵）

次に、従来指摘されてきたように、家康を半跏思惟の神仏に擬える意図はあったのだろうか。実は家康には、束帯天神や勝軍地蔵などの神仏に見立てられた肖像が様々に残る。この際に重要なのは、何れの神仏の姿を拠り所にしているのか、すぐに判別できるよう、多くの神仏像で共通する図像を引用することであろう。束帯天神では束帯姿に、笏を構えた正面向きの姿勢、そして忿怒相、勝軍地蔵では天部のような異国風の甲冑姿に正面向きの白馬、とそれぞれの神仏画で広く用いられている図像が

引用される。神仏に擬する場合、稀少かつ特殊な図像を引用して礼拝者がその意義を読み取れなければ意味がないはずである。この視点から本像を見れば、半跏思惟の菩薩像には、一般的に忿怒相は見当たらず、本像とは逆に左脚を踏み下ろす。さらに当然ながら武具は身につけていない。半跏思惟の菩薩像に擬するのであれば、なぜ忿怒相かつ武装姿という武張った姿で表わされる必要があったのであろうか。

そこで、武装・忿怒・坐像（半跏）・思惟を備えた神仏図像を探せば、思惟のみ当てはまらないものの、例えば平安時代の「大将軍神半跏像」（奈良国立博物館蔵）や「武装神坐像」（奈良・勝手神社蔵）、あるいは江戸時代の随身像など、木彫神像に同姿を多く見出すことができる。さらに、これらの神像には本像と同じく右脚を踏み下ろす像も散見されるなど、半跏思惟の菩薩像よりも共通項が明らかに多く、武装、忿怒という強烈なイメージは武神に由来するとみられる。

家康の生誕地・愛知県岡崎市にある大聖寺・法蔵寺には、江戸時代に東照宮が建立された。そこに納められていた木彫の家康像は、いずれも忿怒・半跏ではないが、武具を着装した坐像で、武神の性格が付与された神像である。このような家康像も礼拝のために多数作られていたはずで、そのバリエーションの一つとして「大将軍神半跏像」などに擬えた武装・忿怒・半跏の家康像があったとしても不思議ではない。三代将軍家も東照大権現を軍神として位置づけていた。家康の肖像では、東照大権現像や徳川十六神将像のように老年の姿で描かれる像が多いが、本像は武神という性格のためか、壮年～中年期の容貌で、武装した家康の木彫神像もまた同様である。また、両者には葵紋が表わされていないという点も共通する。

以上のように、本像に擬された神像イメージを新たに提示したが、思惟のみ武神神像には見られず、半跏思惟像などのイメージが重なっている可能性は否定できない。また、本像の朱塗の三つ足坐具、胡粉で半透明に描かれた草履など、人としての肖像画には見られない異質な器物が描き込まれている点も、別の神仏図様が流入していると考えられる。本像については、成立年代や絵師を含め、未だ研究の余地が多く残されている。

徳川美術館

【所在地】

〒461-0023
愛知県名古屋市東区徳川町1017
TEL：052-935-6262
FAX：052-935-6261
ホームページ　https://www.tokugawa-art-museum.jp/

【交通アクセス】

JR大曽根駅南出口から徒歩約10分
市営バス・名鉄バス徳川園新出来停留所から徒歩約3分

【開館時間】

午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

【休館日】

月曜日（祝日・振替休日の場合は直後の平日）

【展覧会】

「徳川家康―天下人へのあゆみ―」
会期：2023年7月23日（日）～9月18日（月・祝）

【入館料】

一般1600円
高・大生800円
小・中生500円

編集長より

▼たいへん長らくお待たせいたしました。奈良国立博物館編『仏師快慶の研究』がようやく刊行いたしました。B4判・上製本・函入り・606頁、総重量はなんと4・5キロ！　コンパクトで軽い図録が流行の昨今の傾向に完全に背を向けた造本です。けれどもそれは、大判の写真へのこだわり、色の仕上がりを重視した用紙の選択、何よりも内容の充実を追求した結果。時代を超えて残る本に、流行り廃りは関係ない、そう言い切れる仕上がりです。本書の魅力は、各尊像を様々な角度から収めた初公開の写真の数々です。その実現に当たっては、ご所蔵者の皆様のご理解とご協力を賜りました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

▼4月より新たに電子書籍を発行します。第一弾は井上治先生の『花道の思想』、第2弾は万博学研究会編『万博学／Expo-logy』創刊号です。リフロー型の電子書籍は、テキスト検索ができる一方で、頁という概念がないため参照箇所を明確に示すことが難しく、学術書との相性については意見が分かれると思います。弊社では、検索機能という利点を重視してリフロー型を採用しました。「昔は○頁参照と表記していたんだよ」と話をする時代が来るかもしれない、と思っています。

編集後記

▼「てぃーたいむ」の日本人と季節感のお話。「桜が咲いたら伺います」と予告してくださった文学の先生を思い出しました。花の香りに気づいても「もうこんな時期」と焦るばかりの日々。今年度こそは日本人らしさを取り戻したい。　（R）

▼電子書籍（『花道の思想』）の刊行準備中。電子書籍の校正を初めて経験したが、頁や版面がないこと、本文の校正点を打ち出して示せないこと、などなど、とまどう点が多々。電子で読む機会も増やそうと思いつつ、家は紙の本が山積み…。　（大）

▼「書籍の編集から製版まで、制作を一元化できるデジタルツール」が開発されたというニュースを見ました。しかも「作業時間は7割減」だとか。校正紙の山に埋もれながら、昼夜問わず働く。そんな編集者像が変わる日も近いのでしょうか。　（n）

▼表紙図版：琵琶湖疏水沿いのソメイヨシノ／高野友実氏撮影／小野芳朗『風景の近代史』より

■定期購読のご案内

『鴨東通信』は年2回（春・秋）刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信（おうとうつうしん）　No.116
2023（令和5）年4月20日発行
発行　株式会社 **思文閣出版**
〒605-0089
京都市東山区元町355
tel 075-533-6860
fax 075-531-0009
e-mail pub@shibunkaku.co.jp
https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/
表紙デザイン　HON DESIGN

川岡　勉（愛媛大学名誉教授）著

戦国期守護権力の研究

3月刊行

A5判上製・四三〇頁／定価 九、九〇〇円

中世の終わりに登場した戦国大名が自らの力で領国をつくり上げ、幕府や守護といった古い権威から自立して新しい地域支配を行う。このような教科書的な戦国時代像は、じつは「戦国大名」とは何かという判別基準からして曖昧なままに積み上げられてきたもので、近年の研究の深化により多方面から問い直されつつある。本書は、戦国大名という概念を疑うことなく構築されてきた従来の研究に対し、戦国期の守護を軸にすえて多様な権力秩序の展開の様相をさぐったものであり、戦国期守護論を提示して当該期の権力論の再構築を目指す。

【内容目次】

序章　戦国期守護とは何か

第Ⅰ部　中世後期の守護支配と武家領主

第1章　出雲における守護支配と武家領主
補論1　武家領主の権力編成と役負担
第2章　石見における守護支配の展開と益田氏
第3章　大内氏の石見支配と吉見氏

第Ⅱ部　戦国期守護の分国経営と権力構造

第5章　大内氏の分国支配と室町幕府――守護体制
第6章　細川氏・大内氏と寛正伊予の乱
第7章　天文伊予の乱と河野氏権力
第8章　戦国期伊予の国成敗権と領主権
第9章　戦国期但馬の守護と領主

第Ⅲ部　権力秩序の流動化と戦国期守護

第10章　京極氏から尼子氏への出雲国成敗権の継承
第11章　戦国期の権力秩序と出雲尼子氏
第12章　毛利氏の覇権確立と家格上昇
補論2　戦国期の地域社会論と権力移行論

終章　本書の成果と課題

川岡　勉編

中世後期の守護と文書システム

中世守護の受発給文書を網羅的に収集・データベース化。「守護とは何か」という課題に正面から挑む。

定価 一二、一〇〇円

石井伸夫・仁木宏編

守護所・戦国城下町の構造と社会
―阿波国勝瑞

ユニークな空間構造をもつ16世紀の地方都市・勝瑞の姿を解き明かす。

定価 七、二六〇円

浜口誠至著

在京大名細川京兆家の政治史的研究

細川京兆家の政治的位置を明らかにすることで、戦国期幕府政治の構造的特質を解明する。

定価 七、一五〇円

村井良介著

戦国大名権力構造の研究

戦国大名権力の動向は、近世に向けた一貫した過程と捉えられるのか？ 戦国期の権力諸関係の特質を、理論的かつ実証的に描く。

定価 七、七〇〇円

表示価格は税込

法隆寺編

法隆寺史 中
―近世

5月刊行予定

A5判上製函入・約五四〇頁／**定価 七、四八〇円**

日本最初の世界文化遺産である法隆寺1400年におよぶ歴史を通観する、初の寺史全3巻のうちの中巻（近世）、いよいよ刊行。寺所蔵の数万点におよぶ膨大な文書・記録を整理し、いまだ研究が手薄な近世の法隆寺の姿を新史実を盛り込んで明らかにする。

【予定内容目次】

第一部 中世から近世へ――織豊期の法隆寺――
第二章 江戸前期の法隆寺
第三章 法隆寺大工
第四章 開帳・勧化と伽藍の修復
第五章 幕府・朝廷と法隆寺
第六章 年中行事と法会
第七章 寺院組織
第八章 寺領と財政
第九章 庶民の信仰と参詣

高野信治（九州大学名誉教授）**著**

藩領社会と武士意識

7月刊行予定

A5判上製・約二八〇頁／**予価 八、八〇〇円**

近年の藩研究では後景に退きがちな近世武士論の必要性を強く認識し、藩研究の活況に触発されつつも、改めて武家領主支配という観点から、「藩領社会」やそのなかでの大名・武士（家臣）の意識をあぶり出すことを目的とする。

【予定内容目次】

第一部 大名と藩領社会
第一章 大名と藩政
第二章 藩領社会の人々とくらし
第二部 知行・役勤・立身
第三章 近世の武士と知行
第四章 近世大名家臣の役勤と人事
第五章 「名利」と「立身」
第三部 武士の自他像
第六章 『葉隠』思想の形成
第七章 貝原益軒の「武」認識とその行方
第八章 政治社会と武士祭祀

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内 詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

奈良国立博物館編

仏師快慶の研究

3月刊行

B4判上製函入・六〇六頁／

定価 七七、〇〇〇円

二〇一七年に奈良国立博物館で開催された特別展「快慶――日本人を魅了した仏のかたち――」では、現在知られている快慶作品の約8割が一堂に会する史上空前の内容が実現した。この快慶展とその後の調査で得られた知見を、快慶全作品の大判カラー写真とともに収録した快慶研究の決定版。

【予定内容構成】

序・凡例・目次

図版編

在銘作品

1 弥勒菩薩像
2 重要文化財 弥勒菩薩像 （アメリカ ボストン美術館）
3 重要文化財 阿弥陀如来像 （京都 醍醐寺）
4 重要文化財 大日如来像 （京都 遣迎院）
5 国宝 阿弥陀如来および両脇侍像 （滋賀 石山寺）
6 重要文化財 四天王像 （兵庫 浄土寺）
7 重要文化財 執金剛神像・深沙大将像 （和歌山 金剛峯寺）
8 重要文化財 孔雀明王像 （和歌山 金剛峯寺）
9 重要文化財 阿弥陀如来像 （兵庫 浄土寺）
10 重要文化財 菩薩面 （兵庫 浄土寺）
11 重要文化財 阿弥陀如来像 （広島 耕三寺）
12 菩薩像 （静岡 伊豆山浜生協会）
13 国宝 僧形八幡神像 （奈良 東大寺）
14 重要文化財 如来像 （三重 新大仏寺）
頭部 （個人）
手 （アメリカ ハーバード大学美術館）
菩薩像 耳 （個人）
15 重要文化財 阿弥陀如来像 （奈良 東大寺）
16 重要文化財 不動明王像 （京都 醍醐寺）
17 国宝 金剛力士像 （奈良 東大寺）
18 国宝 文殊菩薩像および侍者像 （奈良 安倍文殊院）
19 大日如来像 （東京藝術大学）
20 阿弥陀如来像 （栃木 真教寺）
21 重要文化財 阿弥陀如来像 （京都 松尾寺）
22 重要文化財 阿弥陀如来像 （大阪 八葉蓮華寺）
23 重要文化財 阿弥陀如来像 （奈良 安養寺）
24 重要文化財 阿弥陀如来像 （奈良 西方寺）
25 重要文化財 阿弥陀如来像 （和歌山 遍照光院）
26 阿弥陀如来像 （京都 悲田院）
27 地蔵菩薩像 （京都 如意寺）
28 地蔵菩薩像 （アメリカ メトロポリタン美術館）
29 重要文化財 執金剛神像・深沙大将像 （京都 金剛院）
30 阿弥陀如来像 （大阪 大圓寺）
31 重要文化財 地蔵菩薩像 （奈良 東大寺）
32 重要文化財 阿弥陀如来像 （岡山 東壽院）
33 重要文化財 地蔵菩薩像 （大阪 藤田美術館）
34 重要文化財 十大弟子像 （京都 大報恩寺）
35 重要文化財 阿弥陀如来像 （奈良 光林寺）
36 重要文化財 阿弥陀如来および両脇侍像 （和歌山 光臺院）
37 釈迦如来像 （アメリカ キンベル美術館）
38 阿弥陀如来像 （三重 安楽寺）
39 重要文化財 阿弥陀如来像 （滋賀 圓常寺）
40 重要文化財 阿弥陀如来像 （京都 大行寺）
41 重要文化財 阿弥陀如来像 （奈良 西方院）
42 重要文化財 金剛薩埵像 （京都 隨心院）

重要作品

43 重要文化財 千手観音像 （京都 勝龍寺）
44 菩薩像 （アメリカ フリーア美術館）
45 菩薩像 （京都 百萬遍知恩寺）
46 阿弥陀如来像 （大阪 藤田美術館）
47 阿弥陀如来像・勢至菩薩像 （栃木 地蔵院）
48 観音菩薩像 （個人）
49 重要文化財 金剛力士像 （京都 金剛院）
50 重要文化財 善導大師像 （奈良 来迎寺）
51 重要文化財 （アメリカ メトロポリタン美術館）
52 不動明王像
53 重要文化財 兜跋毘沙門天像 （京都 青蓮院）
54 重要文化財 阿弥陀如来像 （浄土宗）
55 重要文化財 阿弥陀如来像 （京都 正法寺）
56 阿弥陀如来像 （石川 尾添区）
57 重要文化財 西大門勅額八天王像 （奈良 東大寺）
58 重要文化財 不動明王像 （京都 正壽院）
59 重要文化財 聖観音像 （奈良 東大寺）
60 菩薩像 （静岡 鉄舟寺）
61 重要文化財 阿弥陀如来像 （静岡 新光明寺）
62 重要文化財 阿弥陀如来像 （三重 専修寺）
63 重要文化財 阿弥陀如来像 （京都 極楽寺）

資料編

像底
銘文
像内納入品 X線CTスキャン画像
X線透過画像
『南無阿弥陀仏作善集』影印・翻刻
古写真
総論 山口隆介「快慶の生涯と「如法」の仏像」
附録 参考文献
論文 奥 健夫「快慶と生身信仰」
論文 三本周作「快慶作品における金属製荘厳具について――仏師と金工をめぐる一試論――」
作品解説
関連年表
掲載作品一覧
（英文）目次・序・凡例・掲載作品一覧

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内 詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

筒井忠仁（京都大学大学院准教授）**編**

仏師と絵師
―日本・東洋美術の制作者たち

3月刊行

A5判上製・五九二頁／**定価　一三、二〇〇円**

京都大学名誉教授・根立研介先生の退職記念論文集。各分野・各時代の専門家が、日本・東洋美術史における作品制作者である仏師・絵師に焦点をあて執筆した21篇の論考を「仏教美術篇」「世俗絵画篇」の2部構成で提示する。

【目次】

序にかえて（稲本泰生）
第一部　仏教美術篇：「祈り」から「かたち」へ
奈良時代後期木彫像の制作者に関する考察（田中健一）
観心寺仏眼仏母如来像・弥勒如来像の造像背景（高橋早紀子）
京都・大報恩寺（千本釈迦堂）　十大弟子像小考（皿井舞）
快慶の名乗りの意味と意義（松岡久美子）
宮津市大谷寺阿弥陀三尊像と仏師（桑原正明）
高橋逸斎（一斎）再論（大原嘉豊）
キヨッソーネ美術館の銅造菩薩立像（Catalog No. B.1263）（アヴァンツィ・マリア・カルロッタ）
銭弘俶八万四千塔の製作に関する一考察（折山桂子）
百済石工と益山弥勒寺址石燈（柳承珍）
보살형（菩薩形）설법인（說法印）노사나불（盧舎那佛）
이출현（出現）과 삼신불（三身佛）의 정립（定立）（姜素妍）
第二部　世俗絵画篇：制作と享受の場
院政期絵巻における「嗚呼」なるものと後白河院（苫名悠）
三宝院障壁画再考（長谷川貴信）
岩佐又兵衛工房と京都（簡井忠仁）
狩野家による極書の発給（福士雄也）
鶴澤派における絵画学習と地方の門人育成について（有賀茜）
呉春と景文の追薦展観（仁方越洪輝）
住吉弘貫の生没年・経歴について（宮崎もも）
幕末・明治の城崎の文人画家・斎藤畸庵について（山口奈々絵）
絵画審査の初期相（中野慎之）
福田平八郎と「宋元風」（星野靖隆）
藤井達吉と奈良――仏教美術への関心（土生和彦）
後記（簡井忠仁）
根立研介先生略歴年譜／業績目録／執筆者紹介

稲本泰生（京都大学人文科学研究所教授）**編**

釈迦信仰と美術
―作品解釈の新視点

今夏刊行予定

A5判上製・約五九〇頁／**定価　一三、二〇〇円**

釈迦の「生」は、いかに捉えられてきたか。仏伝（釈迦の一代記）の物語、その舞台となった聖地、釈迦関係の聖遺物などにまつわる仏教徒の営為と文物の関係を、具体例に即して検証し、歴史上に位置づける。第一線の研究者13名が、仏伝美術の形成・継承・変容の様相を横断的に浮かび上がらせ、新たな研究視点を提示する共同論集。

【予定目次】

序　章（稲本泰生）
序説にかえて
第Ⅰ部　釈迦の生涯をたどる
いわゆる「仏陀なき仏伝図」に表現されたブッダと声聞乗（有部および大衆部）の仏身論について（外村　中）
南アジア初期仏教美術における聖地表象（島田　明）
聖地と光の幻影（マイケル・ウイリス）
ガンダーラ地方における初期の仏伝図の探究（内記　理）
安塞大仏寺四号窟における図像構成の意義と北朝期の仏伝表象（稲本泰生）
第Ⅱ部　釈迦の姿をあらわす
佛從何出生（岩井共二）
草座釈迦像とその儀礼（西谷　功）
一休宗純賛「苦行釈迦図」（京都・真珠庵）の図像的淵源（板倉聖哲）
天平様式観の形成（中野慎之）
第Ⅲ部　釈迦の不在をこえる
初唐期及び奈良時代の涅槃表象と涅槃観（田中健一）
京都国立博物館蔵釈迦金棺出現図に関する諸問題（大原嘉豊）
「応徳涅槃図」再考（増記隆介）
達磨寺所蔵仏涅槃図考（谷口耕生）

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

金智慧（キムジヘ）（京都大学人文科学研究助教）著

明治歌舞伎史論
―懐古・改良・高尚化

3月刊行

A5判上製・三四八頁／**定価 九、三五〇円**

維新後に到来した文明開化期から、日本文化の保存の風潮が漂った明治末期までの激動の時流の中で、歌舞伎はどのような変化を迎えたのか。

明治に入ってからも依然として「当代劇」として機能していた歌舞伎は、時に強制的な圧力によって改良され、時に自発的に変化し、やがて現代において認識されるような「伝統劇」へと変貌を遂げた。その質的変化の背景には、役者・狂言作者・興行主の意志はさることながら、政府高官や知識人らの政治的利害関係や思想が複雑に交錯している。

本書では、明治という前例のない大変革期における歌舞伎界の動向を「江戸懐古」「脚本改良」「高尚化」という三つの視座から分析し、近世から近現代まで四百余年に至る歌舞伎史のなかで、明治期歌舞伎が占める位置を明らかにする。

【予定内容目次】

はじめに――当代劇から伝統劇へ

第一部　明治期黙阿弥作品における江戸懐古

第一章　「富士額男女繁山」考――「孝女お竹」「桜姫東文章」の再利用

第二章　「月梅薫朧夜」考――「愛想づかし」の変容

第三章　「夢物語盧生容画」考――明治期歌舞伎の「懐古」と「改良」

第二部　明治期歌舞伎の脚本改良

第一章　史劇改良の萌芽――依田学海・川尻宝岑合作『吉野拾遺名歌誉』『文覚上人勧進帳』

第二章　福地桜痴の近松浄瑠璃改作――「十二時会稽曾我」における演劇改良の実践論

第三章　坪内逍遥の史劇改良――『桐一葉』『沓手鳥孤城落月』における「型」の破壊

第三部　明治期歌舞伎の高尚化

第一章　九代目市川団十郎と歌舞伎の「古典化」――天覧劇と「勧進帳」

第二章　新古演劇十種からみる五代目尾上菊五郎の「家」意識

第三章　追善公演の史的展開とその意味

おわりに――「古典歌舞伎」への道

参考文献／初出一覧

あとがき／索引

斉藤利彦著

近世上方歌舞伎と堺 【佛教大学研究叢書】

重要な興行地として堺を取り上げ、上方歌舞伎の地域的展開の一端を明らかにする。

定価 六、九三〇円

薗田稔・福原敏男編

祭礼と芸能の文化史【神社史料研究会叢書Ⅲ】

神社を祭場・舞台として繰り広げられる祭礼と芸能を特集。

定価 七、一五〇円

岡田万里子著

京舞井上流の誕生

近世から近代にいたる流派の歴史を検証し、伝承作品群の成立背景を考証する。

定価 九、九〇〇円

松本郁代・出光佐千子・彬子女王編

風俗絵画の文化学Ⅱ―虚実をうつす機知

研究者がそれぞれの専門性を生かした風俗絵画分析を進め、議論を繰り返して生まれた学際的文化研究。

定価 七、七〇〇円

表示価格は税込

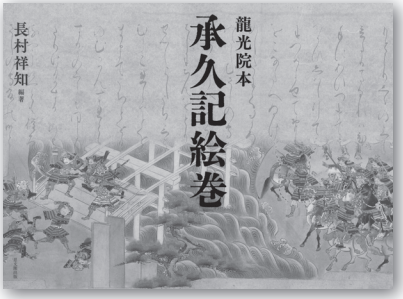
長村祥知（富山大学講師）編著

龍光院本　承久記絵巻

4月刊行

A4判上製横長・三一〇頁（影印カラー一八四頁）／**定価　一〇、四五〇円**

2020年、およそ80年ぶりに再発見された『承久記絵巻』、待望の公刊。本書は、全6巻の絵図全容をカラーページで紹介するとともに、『承久記』流布本系統を平仮名にした本文の翻刻および解題を収録する。絵画史料として貴重な北条義時の肖像などを盛り込む、長らく世に出なかった稀覯の画巻が、現代によみがえる。



【目次】

第一部　影印
龍光院本　承久記絵巻（巻第一～巻第六、附属品等）
第二部　翻刻と解題
龍光院本　承久記絵巻（巻第一～巻第六）詞書
解題　『承久記絵巻』の基礎的研究
附表（A 龍光院本『承久記絵巻』各巻の詳細寸法／B 慶長古活字本『承久記』・龍光院本『承久記絵巻』対照表）
第三部　関連論考
第一章　研究展望『承久記』――二〇一〇年九月以前――
第二章　承久の乱と歴史叙述
第三章　『平安通志』と『承久軍物語』
附　『承久記』文献一覧

園城寺監修／園城寺の仏像編纂委員会編

園城寺の仏像　第五巻
―南北朝～江戸彫刻篇

今春刊行予定

A4判上製函入・二三〇頁／**定価　一九、八〇〇円**

三井寺として親しまれている園城寺の開祖、智証大師の生誕一千二百年を記念して、園城寺および縁の寺に所蔵される仏像を網羅的に収録するシリーズ全5巻の最終巻。宝冠釈迦如来座像ほか南北朝～江戸彫刻の粋を収録。図版はすべてカラー掲載。

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

尾上陽介（東京大学史料編纂所教授）編

禁裏・公家文庫研究 第九輯

4月刊行

B5判上製函入・四五〇頁／**定価 一六、五〇〇円**

これまで勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第九輯。

本輯では、陽明文庫所蔵史料を特集する。

第一部

近衛前久花押の変遷（藤井譲治）

近衛家伝来の『和漢朗詠集』の古筆（島谷弘幸）

平清盛・頼盛両筆「紺紙金字経」および「厳島切」の整理と伝来（惠美千鶴子）

第二部

陽明文庫所蔵『僧綱補任』について――修理を終えた下巻の紹介――（尾上陽介）

近衛前久書状の紹介（「近衛家記録十五函文書」・「東求院筆物」所収分）（藤井譲治・遠藤珠紀）

寛文七年『御ゆとのの上の日々記』の紹介（遠藤珠紀）

『基凞公記』の原本について（尾上陽介）

第三部

陽明文庫所蔵一般文書目録「消息」高精細デジタル撮影目録および索引（遠藤珠紀・尾上陽介・藤井譲治）

太田由佳訳・松田清注

訓読 豊後国志

5月増刷予定

A5判上製・口絵三頁＋七一二頁／**定価 七、七〇〇円**

国とは何か、地域とは何か。豊後岡藩の儒医唐橋君山は遺著『豊後国志』によって、この問いに答えた。

本書は、古代から近世にいたる豊後の地理・歴史・風俗・産物などを、整然とした構成と簡明な漢文で記載した江戸時代の地誌。鬼神のたぐいを「妄」と退ける儒教的合理思想、古代王政への憧憬、かつての大友氏キリシタン王国構想の爪痕など、編者の宗教観、歴史観も垣間見える。

岡藩藩主中川家所蔵本『豊後国志』を底本として読み下す、大分県竹田市竹田総合地域学センター由学館における研究事業の成果。

【中川久定記念基金 発足記念復刊】

表示価格は税込

前田勉（愛知教育大学名誉教授）**著**

江戸思想史の再構築

3月刊行

A5判上製・六八〇頁／**定価 二、〇〇〇円**

これまで江戸思想史の研究者たちは、「パックス・トクガワーナ（徳川の平和）」と称される二百六十年余の間に営まれた、豊饒な江戸思想史の世界を掘り起こしてきた。ただ一方で、個々の面白い事実は相当数、積み上がってきたのだが、それらの事実を組み込んで、新たな江戸思想史として構成するチャレンジは行われていない。（中略）しかし、現代に生きる一人の思想史研究者として、個性豊かな思想家の思想や広く流通している観念を自らの構想力によって構成して、新たな江戸思想史の全体像を提示することが必要であると考えている。この「江戸思想史の再構築」という、少し大仰な書名には、こうした野心が込められている。（本書「あとがき」より）

【目次】

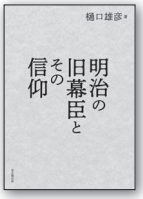
第Ⅰ編　諸学問・宗教の交錯
第一章　儒学・国学・洋学／第二章　近世儒学論／第三章　仏教と江戸の諸思想／第四章　林羅山の仏教批判――『儒仏問答』を中心に――／第五章　近世神道から国学へ／第六章　近世日本における「天壌無窮の神勅」観
第Ⅱ編　兵学・武士道と武国
第一章　兵学と武士道／第二章　近世国家の「仕置」政治論――山鹿素行を起点にして――／第三章　五人組帳の思想史的考察／第四章　山鹿素行『中朝事実』における華夷観念／第五章　近世日本の「武国」観念／第六章　幕末海防論における華夷観念
第Ⅲ編　公論と訓読体
第一章　政治概念「公論」／第二章　諫言の近世日本思想史／第三章　漢文訓読体と敬語／第四章　明治前期の訓読体――言路洞開から公議輿論へ――
第Ⅳ編　日本思想史学の方法
第一章　学問としての日本思想史／第二章　村岡典嗣を読む視点／第三章　石田一良『文化史学　理論と方法』から何を学ぶか／第四章　丸山眞男の江戸思想史像／第五章　安丸良夫の通俗道徳論と天皇制論／第六章　日本近世儒学研究史
終　章

樋口雄彦（国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授）**著**

明治の旧幕臣とその信仰

2月刊行

A5判上製・三九二頁／**定価 八、八〇〇円**



本書は、「旧幕臣」を射程として、主に維新後に受容した思想および信仰の分析を通して、彼らがいかなる精神的な変貌・回心を遂げたのかを考える。とりわけ民間に身を置き宗教活動に従事した人々や、公的に就いた職務とは別に特定の思想・信仰などにもとづく私的側面を持った人物のなかから「旧幕臣」を析出し、横断的にみることで、明治維新期の文化面における変革の様相を浮き彫りにする。

【目次】

序　章　大原幽学没後門人と明治の旧幕臣
第1章　大原幽学の教えを学んだ旧幕臣列伝
第2章　淘宮術をめぐる明治の旧幕臣群像
第3章　新島襄の聖書研究仲間　杉田廉卿について
第4章　旧幕臣のカトリック受容と迫害への抵抗
第5章　西村茂樹の思想的共鳴者としての旧幕臣
第6章　江原素六の教育関係活動――日清・日露戦間期を中心とした素描――
第7章　明治以降の歴史編纂と旧幕臣
第8章　
終　章

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

瀧井一博（国際日本文化研究センター教授）編
アリステア・スウェール（カンタベリー大学准教授）編

明治維新と大衆文化

3月刊行

A5判上製・三二六頁／**定価 九、九〇〇円**

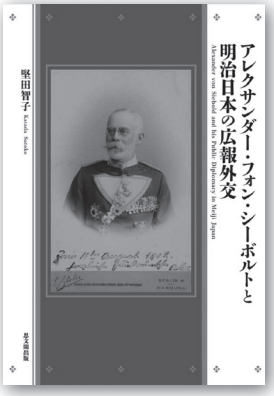
明治新政権の成立後、文明開化は日本社会のキーワードとなった。それは上からの改革であると同時に、新しい時代の「大衆」による下からの開化の幕開けであった――。文芸や雑誌、錦絵新聞といった明治初期の日常生活に密接したメディアを題材としてとりあげる12本の論考で、それらの江戸文化からの連続性を見据えながら、開化の源流を問い直す。

堅田智子著

アレクサンダー・フォン・シーボルトと明治日本の広報外交

3月刊行

A5判上製・五二二頁／**定価 一〇、四五〇円**



青木周蔵、伊藤博文、井上馨、井上勝之助……彼らのかたわらには、「もう一人のシーボルト」がいた。

約40年間、日本とヨーロッパを拠点に活動した明治政府のドイツ人外交官アレクサンダー・フォン・シーボルト。広報外交戦略によってウィーン万博を成功に導き、条約改正や黄禍論との戦いに挑み、「日本帝国近代史の化身」と評された外交官人生とその業績、そして明治日本にもたらされた広報外交の裏面史を日独双方に眠る外交文書、日記、書簡、ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家所蔵資料から解き明かす。

表示価格は税込

大島真理夫著

近代日本経済の自画像

——「西洋」がモデルであった時代

7月刊行予定

A5判上製・五六〇頁／**定価 未定**

日本にとって西洋は明治以来、21世紀にいたるまで、自国の立ち位置を確認する比較軸＝分析モデルであった。しかし今日の世界を見渡すと、そうした時代は終焉を迎えたようである。本書は、過去150年にわたる日本の自国認識の変遷を「西洋がモデルであった時代」ととらえることで見えてくるものを探ろうとする試みであり、求められる新たな自画像を地に足の着いたものにするために不可欠な基礎作業を提示する。

【予定内容目次】

【序章】西洋を比較軸とする自国認識の形成

第Ⅰ部　近代日本における自国認識の変遷
—幕末開港から現在まで—

〔第1章〕第一期（一八五八～一八八六年）＝「半開国」という扇動と複数の自画像
〔第2章〕第二期（一八八六年～一九〇五年）＝共有された「文明国」の自信
〔第3章〕第三期（一九〇五～一九三一年）＝「一等国」の自負心とその動揺
〔第4章〕第四期（一九三一～一九四五年）＝自作した「孤立国」の焦燥
〔第5章〕第五期～第八期（一九四五～二〇〇八年）と「現代」（二〇〇八年～現在）＝戦後日本経済の歴史像

第Ⅱ部　自画像変遷の点描

〔第1章〕田口卯吉の外国貿易論（第一～二期、幕末開港～明治期外国貿易の評価）
〔第2章〕日本経済史学の成立・展開と黒正巌（第二～三期、日欧発展の並行性の認識）
〔第3章〕一九二〇年代の猪谷善一（第三期、「新自由主義」の主張）
〔第4章〕一九三〇年代の猪谷善一（第四期、全体主義への転換）
〔第5章〕遠景としての日本資本主義論争（第四期、後進性認識の深化）

【終章】自画像変遷の位相

小野芳朗著

風景の近代史

3月刊行

A5判上製・三四八頁／**定価 四、九五〇円**

春の京都にあふれるソメイヨシノ、嵐山の春秋を彩る桜と紅葉、御堂筋を金色に染める銀杏並木、瀬戸内の島々を見晴らす雄大な眺め、日本のアルプスとうたわれた滋賀のはげ山——。これらはいずれも近代につくられ、あるいは発見された風景だ。その背後には風景を編集し、物語を紡ぎ、観光地を生み出す近代的な仕組みがある。荒廃した森林の施業、都市計画の実現、国立公園の設置など、行政はさまざまな要請から風景の編集を企図する。その周辺には風景に価値付けする学者たち、郷土を愛する地域の住民、風景で利益を得ようとする観光業者などがいる。風景に関わる人々はじつに多様だ。誰が風景を編集するのか、そして風景は誰のものか？

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

山田奨治（国際日本文化研究センター教授）編

縮小社会の文化創造

今夏刊行予定

B5判並製・約二〇〇頁／**定価 未定**

「豊かさ」が文化を生み出してきた従来から転換し、社会が縮小する時代に人々が生み出し享受する文化とはどのようなものになるだろうか。現代の日本で新たな思想や価値につながる何かが芽生えているのか。あるいは制度や社会的な圧力によって生まれなかったものがありはしないか。「縮小社会の文化創造」という一つのテーマを軸に、多種多様な専門をもつ研究者がそれぞれの視角からの問題提起を行う。

【予定内容目次】

総論　縮む日本社会と文化創造のゆくえ（山田奨治）

第1部　文化空間の縮小

ミュージアムの終活（または再生）（太下義之）
縮小する出版業界：雑誌メディアにおける批評空間の縮小は何を意味するのか（谷川建司）
文化多様性という思考の縮小――万国博覧会から考える（佐野真由子）
幻の「和食」文化（沢田眉香子）
【コラム】イーロン・マスクの「日本消滅」は幻想である（服部圭郎）
【コラム】縮小社会における文化創造と表現の自由（荻野幸太郎）

第2部　文化と労働

「創造」経済と経済格差：現代資本主義における労働と分配について（山本泰三）
巨大化する身体――吉村萬壱『臣女』と縮小社会のアイロニー（田村美由紀）
【コラム】芸術文化の労働・ハラスメントの現状（吉澤弥生）
【コラム】女、子ども、そして縮小社会（玉野井麻利子）

第3部　「地方」からの文化創造

縮小社会における地域アイデンティティの強化の必要性に関する一考察（服部圭郎）
縮小社会におけるアグリツーリズムの可能性（試論）（山下典子）
【コラム】「伝統」がしんどい（沢田眉香子）
【コラム】縮小社会における外国食材市場の拡大、そしてそこから見えること（山下典子）

第4部　福祉からの文化創造

共生社会における障害者の創作活動とは：西淡路希望の家の実践から（服部正）
社会的処方、イギリス、フランスのリール東地区、屋台カフェ（三脇康生）
【コラム】公団住宅の変化――人口拡大と人口縮小の中で（三脇康生）
【コラム】「マンガ」と「障害」の多面的な関係（吉村和真）

附　共同研究会の記録
「縮小社会のエビデンスとメッセージ：人口・経済／医療・福祉／教育・文化／地域・国際、そしてマンガ」展の記録

新見まどか著

唐帝国の滅亡と東部ユーラシア
―藩鎮体制の通史的研究

安史の乱後の唐を支えた藩鎮体制を再評価。唐帝国滅亡の原因に迫る。　**定価 九、三五〇円**

アルバロ・エルナンデス編

メキシコ漫画イストリエタ―民俗文化としての漫画表現

漫画表現研究の分野と日本漫画研究の分野において、重要な貢献が期待される一冊。　**定価 七、二六〇円**

稲賀繁美編

海賊史観からみた世界史の再構築
―交易と情報流通の現在を問い直す

文化交渉・交易全般における「海賊行為」を綜合的に再検討することを目的とした共同研究の報告書。　**定価 一五、四〇〇円**

廣木尚著

アカデミズム史学の危機と復権

アカデミズム史学に連なる歴史家たちの実践から、無思想ともみなされてきた存在の思想性に迫る。　**定価 九、三五〇円**

表示価格は税込

横田香世著

『パステル画家 矢崎千代二
―風景の鼓動を写す』

今夏刊行予定

A5判上製・五二八頁(予定)／**定価 一八、七〇〇円**

洋画家・矢崎千代二（1872～1947）は油彩画家として名を成しながらも、後半生は「旅の絵師」となって世界を巡り、旅で出会う一瞬の光景を「色の速写」と名付けた独自のパステル画法で描き続けた。矢崎の生涯を詳細に追うとともに、画家の表現に大きな影響を与えた画材、パステルについても考究する。

【予定内容目次】

第Ⅰ部　矢崎千代二の画業

第一章　外光派の油彩画家

第二章　旅するパステル画家（1）中国からインド、そしてパリへ

第三章　旅するパステル画家（2）南米での取材を経て東南アジア、満洲へ

第四章　旅するパステル画家（3）戦時下の晩年

附論　「肖像画五千枚」――「画職人」と「藝術家」の狭間で――

第Ⅱ部　パステル画法と画材

第五章　パステル画の小史

第六章　パステル画法と画材研究――「色の速写」のためのパステル改造――

第七章　国産パステルの創出

第Ⅲ部　北京に遺された1008点のパステル画

第八章　継承された畢生の作品群

【資料編】

◆中華民国教育部（1946年当時）への寄贈作品タイトル一覧（中国中央美術学院美術館所蔵）

◆年譜

尾崎信一郎著

戦後日本の抽象美術―具体・前衛書・アンフォルメル

1950年代の関西の美術を新たな視点で捉え直す、戦後美術史の再検証。　**定価 八、二五〇円**

福島可奈子著

混淆する戦前の映像文化―幻燈・玩具映画・小型映画

戦前期日本において映像機器が技術的・産業的に発展・回帰・衰退していくさまを明らかにする。　**定価 九、九〇〇円**

万博学研究会編

万博学／Expo-logy　創刊号

【特集 植民地なき世界の万博】 万博はいかにして現在の姿になったのかという問いに、植民地を切り口にして迫る。　**定価 二、二〇〇円**

ジャポニスム学会編

ジャポニスムを考える―日本文化表象をめぐる他者と自己

日本の外から、あるいは日本の外を意識してイメージされた「日本文化」を研究する問題点と可能性を提起。　**定価 三、五二〇円**

表示価格は税込

西野嘉章（東京大学名誉教授）著

洋学誌―解剖・言語・博物

今夏刊行予定

A5判上製・約三二〇頁／定価 未定

日本人はどのようにして西洋から近代諸学を受容してきたのか。本書はその航跡を辿るものである。幕末から明治、急速な近代化の過程において実働部隊として活躍した人々の多くが、曖昧模糊とした「洋学」の体現者たちであった。外国語の習得から始まり、本草学や外科学、その他異分野を自らの裡に丸ごと抱き込む、そうした天才、秀才、奇才を多く輩出した時代の学問は、また書物や標本は、現代のわれわれの眼に、新鮮に、かつ刺激的に見えるのである。

実物史料として、数多くのカラー図版を収録。学術標本（モノ）を出発点とする研究方法の可能性を、あらたに提起する。

【予定目次】

【第一章】西洋解剖学誌
【第二章】倭解剖学誌
【第三章】芸用解剖学誌
【第四章】洋学辞典誌
【第五章】倭本草学誌
【第六章】学術標本誌
【第七章】日仏学術交流誌
【補　遺】日本近代植物学黎明期における日仏協働の実相
――サヴァティエの遺産から――

洋学史学会監修

青木歳幸／海原亮／沓澤宣賢／佐藤賢一／イサベル・田中・ファンダーレン／松方冬子　編

洋学史研究事典

第34回矢数医史学賞　受賞

B5判上製函入・五一六頁／定価 一四、三〇〇円

◎グローバルな社会における洋学史研究の成果を盛り込んだ最新の研究事典。
◎地方史誌類の編纂事業や地域史研究の隆盛を踏まえ、全国各地に蓄積された洋学史の研究成果を収録。
◎研究篇（グローバル）と地域篇（ローカル）、ふたつの視座からの複眼的な編集。
◎各項目は1頁もしくは2頁で構成され、簡潔に研究情報を把握できる。各項目末には参考文献を収録。
◎歴史研究を志す若い研究者はもとより、洋学史に関心のあるすべての方へ、これからの研究の指針となる必備の書。

表示価格は税込

古画備考研究会編　【待望の重版！】

校訂　原本　古画備考（全5巻・付索引）

好評増刷

A5判上製函入・総三三四頁／**定価　七七、〇〇〇円**

岡倉天心の座右にもあった、江戸時代の『古画備考』原本の姿を忠実に再現。近代に編集された『増訂　古画備考』を大胆に革新。現代の視点から、美術史成立前夜における江戸の学知の達成を世に問い直す、古画備考研究会による永年の成果がここに完結。

◎東京藝術大学附属図書館蔵、朝岡興禎編著『古画備考』巻一～四十八（嘉永3＝1850年起筆）を底本に、朝岡自筆の縮図、印章、署名等の画像とともに全翻刻、項目索引を付す。

◎原本に含まれない巻四十九～五十一は東京国立博物館蔵『古画備考』（図書寮印本）を底本に同様の校訂を行う。

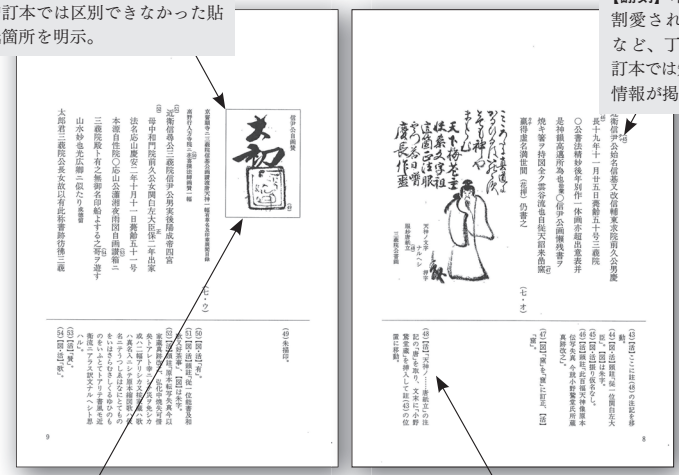
◎太田謹増訂本（明治36＝1903年初版、明治45＝1912年校訂増補第二版、弘文館刊／昭和45＝1970年復刻、思文閣刊）と、その底本である東京国立博物館蔵本（図書寮印本）より校合を行いその校異を註に記載。

《古画備考研究会》

翻刻・校訂分担者：相澤正彦（成城大学）／五十嵐公一（大阪芸術大学）／井田太郎（近畿大学）／出光佐千子（青山学院大学／出光美術館）／*北野良枝（元東京藝術大学）／高橋真作（文化財活用センター／東京国立博物館）／*玉蟲敏子（研究会代表、武蔵野美術大学）／*鶴岡明美（昭和女子大学）／並木誠士（京都工芸繊維大学）／成澤勝嗣（早稲田大学）／野口剛（根津美術館）／畑靖紀（九州国立博物館）／本田光子（愛知県立芸術大学）／宗像晋作（大分県立美術館）／山口真理子（城西国際大学水田美術館）／吉田恵理（静嘉堂文庫美術館）

（以上、本著に関わるメンバーのみ。*は編集委員。50音順）

【　組み見本：巻三　廷臣二　近衛信尹の項　】



増訂本では区別できなかった貼紙箇所を明示。

【翻刻】増訂本編集時に割愛されていた小字註など、丁寧に翻刻。増訂本では知りえなかった情報が掲載されている。

【画像】図、署名、印、画賛等の部分は、原本画像をそのまま掲載。原本に忠実なレイアウトを復原。

【脚註】図書寮印本、太田謹増訂本との校異を掲載。どのように校訂されたかが、簡潔にわかる。

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

オンデマンド出版　既刊案内

中世禅宗の儒学学習と科学知識【オンデマンド版】
川本慎自著　A5判並製・三三〇頁／**定価 七、八一〇円**

劇場の近代化
―帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場【オンデマンド版】
永井聡子著　A5判並製・二二八頁／**定価 五、〇六〇円**

鳥居龍蔵の学問と世界【オンデマンド版】
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編
A5判並製・五六八頁＋カラー口絵八頁／**定価 一四、六三〇円**

森と火の環境史―近世・近代日本の焼畑と植生【オンデマンド版】
米家泰作著　A5判並製・四〇〇頁／**定価 八、四七〇円**

神話文学の展開―貴船神話研究序説【オンデマンド版】
三浦俊介著　A5判並製・四九四頁／**定価 一三、二〇〇円**

御堂関白記全註釈　寛弘2年　第1期　復刻【オンデマンド版】
山中裕編　A5判並製・二〇六頁／**定価 六、二七〇円**

現代中国茶文化考【オンデマンド版】
王静著　A5判並製・三〇八頁／**定価 六、八二〇円**

大阪舎密局の史的展開―京都大学の源流【オンデマンド版】
藤田英夫著　A5判並製・二八八頁／**定価 六、六〇〇円**

古代寺院史の研究【オンデマンド版】
菱田哲郎・吉川真司編
B5判並製・五一四頁／**定価 一四、三〇〇円**

日本古代即位儀礼史の研究【オンデマンド版】
加茂正典著　A5判並製・四九八頁／**定価 一一、〇〇〇円**

茶の湯とイエズス会宣教師―中世の異文化交流【オンデマンド版】
スムットニー祐美著　四六判並製・二五〇頁／**定価 五、五〇〇円**

地域名菓の誕生【オンデマンド版】
橋爪伸子著　A5判並製・四八六頁／**定価 一〇、六七〇円**

修訂版　上代学制の研究　桃裕行著作集　第1巻
【オンデマンド版】
桃裕行著　A5判並製・五〇八頁／**定価 一六、七二〇円**

古記録の研究（上）　桃裕行著作集　第4巻【オンデマンド版】
桃裕行著　A5判並製・二九八頁／**定価 九、七九〇円**

暦法の研究（上）　桃裕行著作集　第7巻【オンデマンド版】
桃裕行著　A5判並製・三二二頁／**定価 一〇、六七〇円**

暦法の研究（下）　桃裕行著作集　第8巻【オンデマンド版】
桃裕行著　A5判並製・三三六頁／**定価 七、三七〇円**

表示価格は税込

思文閣グループの逸品紹介

美の縁

北野恒富・菅楯彦　美人

近代大阪画壇を代表する日本画家、北野恒富と菅楯彦による合作。北野恒富は彫刻師、挿絵画家として出発した後画家として独立、大阪茶話会の結成や画塾・白耀社の設立など、大阪画壇の振興に尽力した。一方の菅楯彦はほぼ独学で絵を学ぶ傍ら、漢学や有職故実、雅楽などにも関心を広げ、失われゆく浪花情緒や風俗を描き残した。二人は停滞していた大阪画壇の革新を目指し、大正元年に結成された大正美術会に創立から携わっている。

本作は人物を恒富が、着物の文様を楯彦が描いている。女性の切れ長の瞳に穏やかな表情は、当時〝画壇の悪魔派〟と呼ばれ退廃的な女性を描いた恒富とは一線を画すような画風である。美人画を描く場合、着物は実際着用したところを想定して文様を描くこともあるが、楯彦は舟遊びに興じる風雅な平安貴族を描くために、白い衣をキャンバスのように用いた点に面白味があろう。両者による箱書には「大正三年初夏」と記されており、半襟の藤、着物の菖蒲はまさに初夏の趣を表している。

両者とも画業の模索期にあって制作された本作は、同じ境遇にある気心の知れた者同士だからこそ通じ合う、穏やかな心うちが反映されているようにも窺える。

（思文閣銀座・永田佑海）

我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU
思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 531-0001 FAX(075)531-5533
https://www.shibunkaku.co.jp/
info@shibunkaku.co.jp

思文閣公式 Twitter

大入札会・個展情報等、随時更新中

@G_SHIBUNKAKU

SHIBUNKAKU
思文閣

思文閣古書資料目録

奈良絵巻
七草　一巻

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 752-0005 FAX(075)525-7155
https://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル
「Shibunkaku Works」
思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを
活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。
詳細は小社までお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 533-6860 FAX(075)531-0009
https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/
pub@shibunkaku.co.jp